

特集 連載

## 【戦時の医療】（下）決意強く、帰国後もリモートで支援継続 福岡大・江川氏、「撤収時の医薬品整理まで」

2022/7/25 04:50



薬袋で薬を渡す江川氏（提供：ピースウィンズ・ジャパン）

特定非営利活動法人「ピースウィンズ・ジャパン」の医療チームの一員として、医師・看護師と共にウクライナの隣国モルドバの首都・キシナウ市内で、仮設診療所の運営に携わった福岡大薬学部の江川孝教授。1カ月間にわたる活動を終え、5月中旬に帰国したが、現地での活動中に整備した「在庫管理表」や「医薬品集アプリ」を活用し、現在も日本国内からリモートで支援活動を続ける。診療所撤収時には残っている医薬品を整理するため、「できれば現地に行きたい」と最後まで支援に携わる決意だ。

4月中旬に現地入りした江川氏は、まず医薬品の調達ルートを確認するため近隣の薬局と交渉し、徒歩10分圏内にある3店舗で処方箋医薬品を購入できる体制を整えた。モルドバは避難民1人に1日30ユーロ（約4000円）を支援していたが、江川氏によると避難者たちは「まずは食料にお金を使っていた。薬までは手が回らない」のが実態だった。

また、現地で苦労したことのひとつが「言語」。モルドバの公用語はルーマニア語だが、旧ソ連のためロシア語も使われている。避難民はおおむねルーマニア語を使う人が多かったが、通訳の関係で主にロシア語でやりとりしたという。

### ●「イラスト」「薬袋」活用、コミュニケーションに工夫

服薬指導は翻訳機などを使ったほか、通訳を介して日本語から英語、そしてロシア語に訳した。加えて、滞在期間中に現地の「モルドバ日本交流財団」で医学生を通訳としてリクルート。「医療用語を知っているのだから戦力になった」と振り返る。服薬指導時には症状を示すイラストなどを使って用法を説明したほか、現地では使用する文化がなかった薬袋も活用。朝昼夕のイラスト付きの薬袋を使い、飲み方が一目で分かるようにした。

診療所を利用する避難者たちは、モルドバ経由で第三国へ避難する人や、ウクライナに帰国する人などさまざまで、滞在期間が短く継続的な服薬管理ができないという課題もあった。そのため第三国に行っても何の薬が分かるよう、「途中から薬袋には、英語で書いたお薬手帳代わりの資料も入れた」。円滑なコミュニケーションと適切な情報提供を実現するため、さまざまな資源や文化を活用し工夫を重ねた。

避難者は「いつでも逃げられるように」と靴を履いたままのケースが多く、特に糖尿病の人で蜂窩織炎が多いという特徴も見られた。江川氏は通常であれば抗生物質を10日分処方する場合にも、「様子を見ることが出来る」よう5日分で2回に分けることを医師に提案するなど、必要に応じて患者と接する機会を増やすことも心掛けたという。

### ●在庫管理や医薬品集アプリの作成、学生が大きな戦力に

診療所の医薬品整理には、当初は衣装ケースを使用していたが、東日本大震災のときと同様に症状や臓器ごとに分類し、「ユニパック」でまとめた。その後、鍵付きの医薬品庫を入手できたため、内服薬や小児用薬、外用薬を棚ごとに区分し、保管することが可能になり、薬剤師以外の医療職種でも分かるように整理してから帰国したという。

医薬品の在庫管理表は、自身の帰国後も見据えてスプレッドシートで作成。シートはクラウド上で共有しているため、現地で新たに購入した医薬品も日本にいながら管理ができる。医薬品ごとに発注点を設定し、在庫が発注点を下回るとアラートが表示される仕組みも搭載した。

さらに、薬剤師が不在になっても医薬品情報が提供できる体制を整えるため、江川氏が帰国するまでに研究室所属の学生たちが医薬品集アプリを日本で開発。新たな医薬品を購入した際には日本に写真を送ってもらい、ウェブでその医薬品の情報を調べた上で、現地での診療開始時間までにアプリの情報を更新している。こうした学生たちの取り組みについて、「大きな戦力」と高く評価する。

診療所を撤収するときには残った薬の名前や錠数などを整理し、最終的には現地の医療機関などに寄付する見通しだ。すでに一覧表は作成済みだが、「その当たりの作業は薬剤師の方がやりやすい」ため、可能ならあらためて現地に出向きたいと意欲を示す。

### ●「ウクライナに関心を」

戦争状態が長期化する中、江川氏は日本国内での関心が薄れていくことを危惧する。日本の薬剤師に向けて「日本にいても、できる支援があると思う。（今後も）少しでもウクライナに関心を持ってもらいたい」とのメッセージを送った。（盛川 太一）